112 誌上発表

『骨度正穴考図』について

鶴田　泰平
日本鍼灸研究会

『骨度正穴考図』2巻は，江戸後期の医家・岡田静安（1770～1848）の著した，骨度，経穴および蔵府の研究書である．文化10年（1813）の秋元玄仙序と文化9年（1812）の静安序を付した文政5年（1822）刊本が，国立公文書館内閣文庫（195-0104），武田科学振興財団杏雨書屋（杏5203），京都大学附属図書館富士川文庫（コ・65）に所蔵されている．

岡田静安の聞き書きである『骨度正穴考聞書』の巻末に記された略歴その他によれば，岡田静安は武蔵国蕨の人で，幼名を寅吉といい，業成って名を元糖，号を華陽，園を松響と称し，後に俗名を静安，実名を静黙，字を子成，慮得斎と改名した．『素問』『霊枢』『難経』『傷寒論』『金匱要略』などの医経，医書に精通し，『骨度正穴考図』『骨度正穴考聞書』以外にも，『経脈骨度解』『孔穴主対』『外台鍼灸』『慮得斎方成』など多方面に多数の著書を遺したが，現在伝存の確認されるものは，『松響園灸治録』『古今方彙分量解』『薬方分量考』『農家至宝記』『傷寒論発明録』などの医薬書や鍼灸書，『素問韻語図解』『難経韻語図解』『傷寒論韻語図解』『中庸韻語図解』『大学韻語図解』『孝経韻語図解』といった医書や経書に関する押韻の研究書などである．

今回は江戸中後期における骨度研究史を考察する一環として，『骨度正穴考図』を検討した．

本書の上巻では，二つの序と凡例，目録に続き，先ず「同身之寸解」と題して人体各所の同身寸を記した後，「仰側骨度並之図」から「内踝以下分寸之図」の26図にて全身の骨度と経穴を，「蔵府並位之図」（原書の目録に基づく仮称：オリエント出版社『臨床鍼灸古典全書』第12巻目次による）から「蔵府右面之図」（仮称：同前）の4図にて体腔内の蔵府配置を，「肺右面之図」から「肝左面之図」の16図にて「肺」「大腸」「胃」「脾」「心」「小腸」「膀胱」「腎」「心包」「三焦」「胆」「肝」の物体的イメージ図とその形態及び位置を，「肋骨之図」にて肋骨と胸腹部の経穴との位置関係を図示及び解説している．下巻では「仰人骨度」「側人骨度」「横人骨度」「骨度雑類」にて全身骨度を，「面部」「頭部」「頸膺腹部」「肩背腰部」「手三陽部」「手三陰部」「足外踝以上三陽部」「足内踝以上三陰部」「足内踝以下三陰三陽部」にて人体部位ごとに総数352穴の経穴位置を，「弁蔵府尺升釈」「弁蔵府部位」にて『霊枢』腸胃篇所載の舌の寸法・重量を基準とする，各蔵府の形態イメージと位置を，『難経』その他の医書を援用しながら論じている．なお，上巻の骨度と経穴に関する図には，方眼状の升目模様が重ねられたものが多く，とくに人体の前面後面などの経穴相互の位置関係が一目瞭然に示され，また下巻は上巻に記載された図の詳解書的役割を果たしている．ちなみに静安はその凡例で，『骨度正穴考図』を著すにあたり，『内経』『難経』『甲乙経』『千金方』『千金翼方』『外台秘要方』『神応経』『明堂灸経』『資生経』『鍼灸銅人』『鍼灸聚英』『類経』『医学入門』『医宗必読』『霊枢註證発微』を用いて『十四経発揮』を刪修したと述べている．

江戸中後期には，鍼灸臨床において経穴の位置決定が重要であるとの考えから，他にも多くの骨度経穴書が著されているが，『骨度正穴考図』の詳細な作図からは，骨度と経穴位置の理解をより簡便にしようとしていた静安の姿勢が窺える．